

27 海兵団の教育

太平洋戦争の戦前・戦中、海軍の各軍港地には「海兵団」という大きな屯営が置かれていた。毎年、徴兵あるいは志願兵で海軍に徴募された多数の青少年が、その団門をくぐるので民間にもよく庁名は知られていた。

入団すると、たとえば水兵であれば「海軍二等水兵（昭和17年/1942年10月31日までの四等水兵）」を命じられ、数カ月間シゴキの新兵教育を受けるのであった。というと、ここが海兵団の本部、本隊のように受け取られるが、実は「海兵団練習部」と名付けられた団内組織の一部、教育部門だった。

練習部で新兵教育を受ける兵種には数種類あった。階級表に並んでいた順にいくと、水兵、整備兵、機関兵、工作兵だった。以上が「兵科」で、あと「特務科」といわれる看護科と主計科の“分隊”が並んでいた。すなわち新兵教育は兵種ごとに、分隊別に実施されていたのだ。

ここでの分隊というのは、陸軍や海軍陸戦隊の分隊、小隊、中隊の分隊とは違う。長の階級からすると、陸軍部隊の中隊にほぼ匹敵しよう。新兵分隊の「分隊長」には大尉、あるいは兵隊から立身出世したかれらの大先輩である特務大尉もしくは特務中尉が任命された。

そして、その下に特務少尉か兵曹長の「分隊長」という補佐役が付くようになっていた。さらに分隊は数個の「教班」に分かれ、下士官が「教班長」の任に就き、厳あり寛ありの個別指導に近い教育をしたのである。教班

員は15名前後であった。

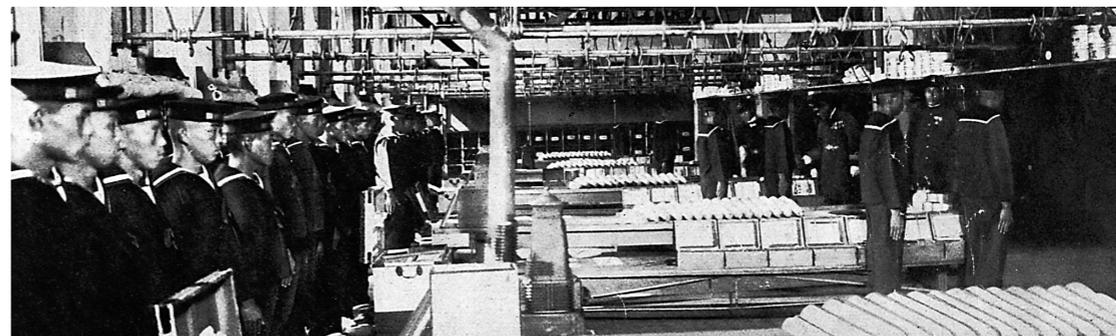
ともあれ、海兵団練習部とは海水のショッパさも知らなかったような少年も混じっている若者たちに、艦上で機敏に働くことのできる兵隊としての基礎を、半年に足りない短期間で叩きこもうという海軍部隊なのだ。

まずは練兵場で陸戦教練から開始される。陸軍歩兵でもないのに、オイッチニの徒手から始まり、テッポー担いでの執銃教練まで行なうが、これは命じられたことを厳守する軍紀心を養うのに最適な訓練だったからだ。それから12本のオールで漕ぐ短艇漕ぎ。こいつはとりわけキツイ。だが“船乗り兵”らしい根性とスマートネスを植え付けるには、もってこいであった。水兵、機関兵だけでなく、看護兵や主計兵も一応は習った。

そんな教練ばかりでなく、座学もあった。水兵ならば「海軍四等水兵運用術教科書」「砲術水雷術航空術潜航術教科書」とか「海軍兵須知提要」「修身教科書」なんぞといった、ブックを渡されて勉強したのだ。

平時、教育期間は志願兵が5カ月半、徴兵は4カ月半だった。しかし、15年頃から短縮される。日華事変と世界情勢の影響だが、4カ月程度で卒業、三等兵に進級させて艦船部隊に送り出した。さらに太平洋戦争が始まってからは、2カ月から3カ月と大幅に速成化されることになる。

以上、各地にある海兵団練習部で6兵種の新兵が教育



ハンモックや衣類などの整頓状態の点検を受ける水兵。

されたのだが、飛行兵と軍楽兵は別だった。「予科練」の名で現在でも知られる甲種飛行予科練習生（旧制中学校3年終了程度の学力を持つ者から）と乙種飛行予科練習生（同高等学校卒業程度）は、試験に合格・採用されると、「海軍二等飛行兵（17年10月31日までの四等飛行兵）」として、いきなり土浦航空隊や三重航空隊などの「練習航空隊」へ入隊し、そこで新兵教育を受けたのである。

軍楽兵の新兵教育も海兵団練習部で実施されたのだが、システムが独特で変わっていた。徴兵からは採用せず、志願兵だけで構成されていた。そして出身地に関係なく、全国各鎮守府からの新兵を全部横須賀海兵団に集め、ここの練習部で軍楽兵の初歩教育を行なったのだ。

軍楽科には、“海軍軍楽学校”といったような術科学校がなかった。そこで“横団”練習部での新兵教育が終わり、一等軍楽兵（同三等軍楽兵）に進級すると、全員そのまま普通科軍楽術練習生として勉強を続けることになっていた。そのあと、各鎮守府の海兵団軍楽隊や連合艦隊はじめ艦隊の司令部付軍楽隊隊員としての勤務に入る。さらに選ばれた軍楽兵は、今度は東京軍楽隊に入隊し、2年間、ここで高等科練習生として教育を受けた。

“東音”では本務とする吹奏楽に必要な勉強だけでなく、毎週3日ほどは上野の東京音楽学校（現在の東京芸術大学音楽学部）に通学した。バイオリン、コントラバス、チェロのうちどれか一つを習い、コントラバスの練習生は2年生になるとピアノの勉強もしたのである。

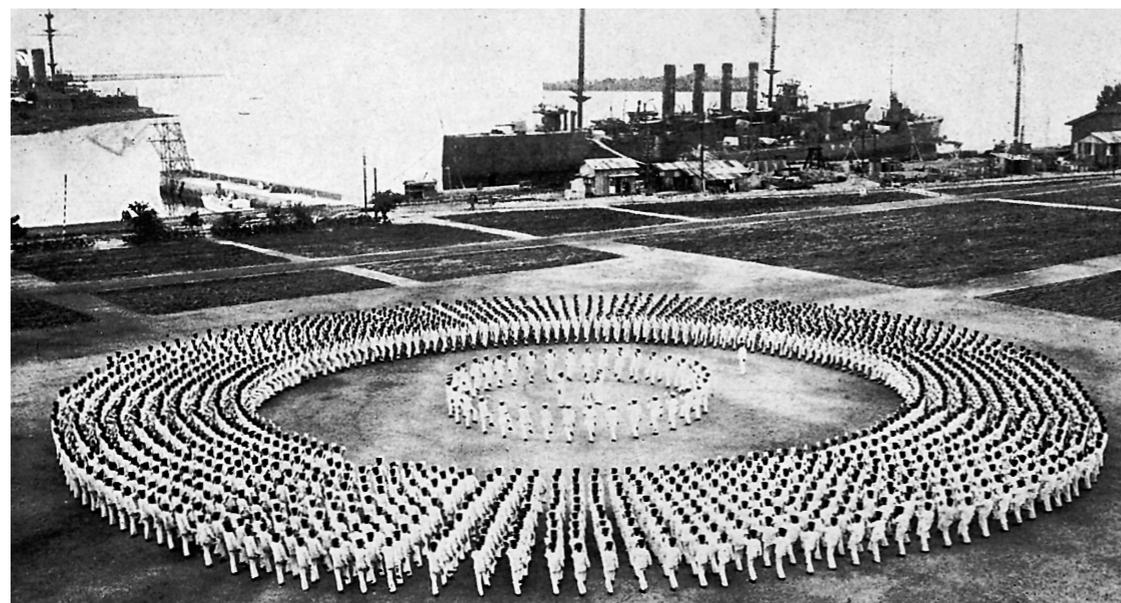
そしてこの中から、数名の優秀者が選出され、「特修科軍楽術練習生」として1年間の研修を受けた。これは未来の特務士官、隊長サン養成のコースといってよかったであろう。選出条件は、「作曲ナドニオガアリ、マタ軍楽隊幹部トシテ適スル者」となっていた。

太平洋戦争中の海兵団練習部は、もう一つ、特別な志願兵の新兵教育を行なった。海軍志願兵への応募年齢の一番下は以前から17歳だったが、15年度から16歳に下げることにした。日華事変が解決できないまま、国際情勢はさらに緊張の度を加えていた。人的にも軍備を強化するため、若くて有能な下士官を一人でも多くと当局は望んだのである。

それまでも、予科練のほか、水兵のうち掌電信兵と水中測的の掌機雷兵だけは、15歳から志願可能な特例を設けていた。そこで海軍省はこういう若年者からの募集を、他の一般兵種にまで拡張することにしたのだ。大戦直前の16年7月、「17年採用ノ志願兵中、一般ノ水兵、整備兵、機関兵、工作兵、看護兵、主計兵ヲ15歳以上16歳未満ノ者カラ採用」してもよろしいとの令達を出したのである。かれらは「特例年齢兵」（特別年少兵ともいう）略して「特年兵」と呼ばれ、従前の志願兵とは区別して扱われることになった。

この達示により開戦後の17年9月1日、特年兵・第1期が各海兵団練習部へ入団した。海軍当局のかれらへの期待は大きかった。将来は極力特務士官に進級させ、活躍することを望んだ。そこで、教育期間を“1年6カ月”の長期間とし、普通学の時間をタププリ取ることにしたのだ。そして、練習部卒業後もすぐ海上、陸上の実施部隊には出さず、各種術科学校の普通科練習生に入校させることに決めたのである。しかし戦争の急迫は、かれらに1年半の海兵団教育を許さず、1年の短縮教育で術科学校へ移っていった。

もう一つ、変わった練習生制度が横須賀海兵団に、終戦間際につくられた。20年5月、「法務兵」と称する新兵種が設けられたからなのだが、これについては35項「海軍兵のコース」であらためて述べることにする。



円陣を組んでの軍歌演習。

Q 27 軍楽兵の教育はどこで海兵団で行ったか？

- 1 横須賀 2 呉 3 佐世保 4 舞鶴